

## 明代マンチュリア史研究の現状と課題（下）

### Reviewing the Historical Studies of Manchuria in the Ming Era (2)

塚 瀬 進\*

Susumu TSUKASE

#### はじめに—概説書の考察

##### 第一章 明朝によるマンチュリア統治

- ①遼東統治
- ②ヌルガン都司・羈糜衛所
- ③朝鮮・モンゴルとの関係
- ④遼東辺牆
- ⑤軍屯、軍戸・軍士
- ⑥明代後期の遼東

(以下本号)

##### 第二章 女真史研究

- ①建州女真
- ②海西女真・フルン四部
- ③野人女真
- ④明朝・朝鮮・モンゴルとの関係
- ⑤社会経済状況
- ⑥馬市
- ⑦三万衛、安楽・自在州

#### 第2章. 女真史研究

明代の女真についての概説的な研究としては、孫進己[1987]があげられる。これは、古代から明代までの女真の通史であるが、明代の叙述は詳しく参考になる。王冬芳[2009]は明代女真についての大著をまとめ、明初からヌルハチの勃興まで、どのような過程を経ていたのか、女真社会の状況変化に重点を置いて考察した。また王冬芳[2010b]は、女真、満洲人関係の論考を収録した著作も出している。藤紹箴[1986b]は、16世紀の女真の状況を検討して、ヌルハチ台頭に至るまでの過程を考察した。戦前に孟森[1934-37]が著した『明元清系通紀』は、概説ではないが、女真にかかわる史料を明実録、李朝実録から抽出して、年代別に考証しているのだから、概説的な知識を得ることができる。日本語で書かれた明代の女真についての概説書はないが、愛新覚羅烏拉熙春[2009]の著作が有用である。

女真といっても一様ではなく、明朝は建州、海西、野人の3種類を意識していた。清朝の認識は、満洲五部(ジェチエン、フネヘ、スクスフ、ワンギヤ、ドンゴ)、フルン四部(ハダ、イエヘ、ウラ、ホイファ)、東海三部(ワルカ、クルカ、ウエジ)、長白山二部(ネエン部、鴨緑江部)であった。こうした分類は現代の部族、種族の分類とは異なっている。これらの集団には一定の同質性があったと

\*環境ツーリズム学部教授

考えられるが、現代的な部族分類を念頭に考えることには注意を要する。王鍾翰[1956]は主に『明実録』を使い、洪武、永楽年間の女真の分布について検討した。マンチュリアでの女真の分布については、李学智[1984]が考察している。

以下では明朝の区分にもとづいて、建州女真、海西女真(フルン四部)、野人女真に分けて述べてみたい。

### ①建州女真について

建州女真については、園田一亀[1948、1953]がその勃興から消滅までを跡付けている。『明実録』、『李朝実録』を読み込んで書かれた園田一亀の著作は、まず読むべき研究である。また、藤紹箴[1979]も建州女真について概述している。

元末～洪武年間にかけて建州女真がどこで暮らしたのか、明確な史料がないため、確定できていない。元末には三姓近隣の馬大屯にいたという見解が、戦前から有力である[塚瀬進2010、p. 87注4]。しかし、近年では藤紹箴[2010、2011]が反論を唱えている。どのような理由から、いつ南下したかについては、蒋秀松[1991]、董万倫[1991b]、李自然[2000]が考察している。しかし、史料が少ないため見解は一致していない。元末・明初期の女真の状況を知る手掛かりとして、朝鮮王朝建国に関する説話を集めた『龍飛御天歌』には女真に関する記述がある。この記述の検討は、賈敬顔[1991]、董万倫[1993b、1994]がしている。

永楽帝は女真の招撫をおこない、1403年にアハチュ(阿哈出)が指揮使に任命して、建州衛が設置された。建州衛の場所については論争が続いている。池内宏[1916-20、引用は1972、pp. 100-103]は間島方面にあったと主張した。これに対して和田清[1937、引用は1955、pp. 478-483]は、明朝が最初に設置した衛所である建州衛が、遼東から遠い間島方面に置かれたのは不自然だとし、建州衛は鳳州(山城子付近～現在の梅河口市付近)にあったとした。園田一亀[1948、p. 14]は和田清説を支持して建州衛は鳳州にあったとし、河内良弘[1992、pp. 141-143]も鳳州説を支持している。

日本の研究者は鳳州説の支持者が多いが、中国の研究者の見解はさまざまである。孟森[1932a]は琿春付近に建州衛は置かれたと考証した。徐中

舒[1936]、李学智[1956b]は綏芬河流域の双城堡だと主張し、楊暘[1982、pp. 207-212]も綏芬河流域だとしている。郭毅生[1979]は東寧県にある大城堡古城、徐健竹[1982]は図們と琿春河の間にあった古南京大石城、董万倫[1985]は輝發江流域だと主張した。李建才[1986]は諸説に検討を加えるとともに独自の考証をおこない、現在はロシア領になっているウスリスク近隣だと主張した。庄福林[1996]は現在の樺甸県に残る蘇密城だと考証した。

建州左衛の動向については、河内良弘[1972、1973a]が明朝、朝鮮との関係にも留意しながら考察している。建州左衛の設立年代、初期の活動については鴛淵一[1930]、王冬芳[2005b]が考証している。建州左衛の首長であったモンケテムルについては、董万倫[1992]が詳細な伝記を書いている。何溥滢[1992]はモンケテムルの生涯について、趙東升[2003]はその出生地について考察している。1433年にモンケテムルはヤムダウの襲撃を受け、殺害された。ヤムダウおよびこの事件については、蒋秀松[1983c]、王兆蘭[1994]、孫与常[1999]が考察している。

建州衛の動向については、河内良弘[1972]が明朝、朝鮮との関係もふまえながら考察し、張士尊[2007]は渾江流域での活動を考察している。建州衛の首長であった李満住は、永楽年間に首長となり、「成化三年の役」(1467年)の時に殺害された。李満住の活動については、呉晗[1934]、蒋秀松[1983b]、王雁[2006]が検討している。また承志[2009]の研究も、建州三衛の動向を知る上では有用である。

建州女真の特徴として、移動を繰り返していた点あげられる。それゆえ戦前以来、建州女真の移動については多くの論文が出されてきた。戦前では、稲葉岩吉[1913a]、孟森[1932a、1932b]、徐中舒[1936]、和田清[1937]が検討している。戦後では、河内良弘[1960]、薛虹[1978]、蒋秀松[1997a]が元末から正統年間に建州三衛が成立するまでの経緯について考察している。張泰湘[1985]は史料が少ない洪武年間の動向について、董万倫[1985、1987、1990、1991a]は洪武・永楽年間の状況について考察している。園田一亀[1951]は、正統～弘治年間における建州三衛の位置について考証している

建州左衛の移動については、徐建竹[1983a]が明初から1440年に李満住の建州衛に合流するまでの経過について述べている。モンケテムルが1411年に会寧から鳳州へ移動したことについては蔣秀松[1990]が、1423年の鳳州から会寧への移動については蔣秀松[1989b]が考察している。1440年にファンチャらが会寧から蘇子河への移動については、蔣秀松[1997c]、刁書仁[2010b]が考察している。鴛淵一[1931]は、1433年から成化年間までの期間、建州左衛の遷住地がどこであったのか考証している。また、王冬芳[2007]もモンケテムルの移動について検討している。

建州女真の社会が奴隸制であったのか、また奴隸はどのような人々であったのかについては議論が交わされている。和田清[1934-37.引用は1955、pp. 447-448]はモンケテムルが永楽末年に会寧に移動した際には、多くの漢人奴隸を伴っていたことを指摘し、漢人奴隸が生産者であったと主張した。次いで、旗田巍[1940]は女真のもとで使役された漢人が朝鮮に逃亡し、その後明朝へ解送される記事が『李朝実録』には多数あることを指摘し、15世紀前半には多数の漢人奴隸が建州女真にはいたことを主張した。これに対して河内良弘[1961、1963]は疑問を唱えた。河内良弘は朝鮮から明朝へ送還された漢人は、明朝から逃亡した軍士であり奴隸ではなかったと指摘し、さらに15世紀前半の建州女真の状況を検証して、多数の奴隸を養える状況ではなかったとして、奴隸の存在を否定した。

中国での研究は、女真社会の奴隸制は15世紀に始まるという見解が多い。莫東寅[1958]は、女真社会全体の状況を検討して、15世紀には奴隸制であったと主張した。薛虹[1979]は、明代初期の建州女真は奴隸を使った農業もしていたが、移動を繰り返したため土地私有の観念は存在せず、「早熟的な奴隸制」であったと主張した。また薛虹[1986]は、『李朝実録』にある李思哲報告を分析し、やはり「早熟的な奴隸制」であったと主張している。李景蘭[1983、1986]、王学松[1986]、蔣維忠[1995]も、15世紀に建州女真は奴隸制社会になったと主張した。楊業進[1987]は、成化以降の建州女真社会には奴隸は多数いたが、農業ではなく人参採取や狩猟に従事していたと主張した。奴隸をどのよ

うに考えるのかは、ヌルハチ期の「アハ」（奴隸的な状況下にあった人）の解釈ともかかわり重要な論点である。今後は発展段階論的な発想から遡及した理解ではなく、建州女真そのものの状況から考察する方向性が必要だと指摘したい。

嘉靖年間以降、建州三衛の勢力は衰退してヌルハチが台頭していく。衰退する建州三衛の動向については、園田一亀[1934、1956]、河内良弘[1992]が考察している。ヌルハチ台頭以前に建州女真のなかで勢力を振るっていた王杲については、張璇如[1985]、趙広慶[1991]、趙立静[1994]、趙維和[2003]、任麗穎[2011]、諸星健児[1994]が、王兀堂については姚斌[2003]、孟凡雲[2011]が考察している。夔凡[1998b]は、建州女真が衰えるなか、女真を中心としてモンゴル人、漢人、朝鮮人の融合が進み、満洲人が形成されていたと指摘した。

建州女真に分類された毛憐衛については、徐健竹[1983b]、蔣秀松[1984c]による研究がある。

## ②海西女真・フルン四部

明朝は女真を建州、海西、野人に区別していたが、その区別の基準は現代の民族、種族と同じではない。和田清[1959、p. 403]は、「明代の満洲が建州、海西、野人の三衛に分れていた云う俗説には根拠がない」とし、「北西女直の諸衛を海西」と、「南方女直の諸衛を建州」と、「野人とは本来北山野人と云て、黒龍江山中の土人」を指す語句であったと述べている

「海西」の語句は元代から使われていた[河内良弘1992、pp. 232-233]。王鍾翰[1956.引用は『王鍾翰清史論集』1、p. 787]は、「海西」とは松花江流域一帯の場所をさす言葉だと述べている。明朝はヌルガン地区に多数の衛所を設置したが、それらの衛所が海西女真に属するのか、建州女真に属するのか、すべてを分類した記述はしていない。したがって、現在の研究者が衛所の場所から推定して、その衛所は海西女真に属していたと判断している場合もある。女真自身は「忽刺温」と称していた。朝鮮の史料も「忽刺温」、「火刺温」と記述しており、王崇時[1993]は『李朝実録』の記述について分析している。

河内良弘[1975]は、海西女真に属した兀者衛について、その位置、生活、婚姻、風習などについ

て考察している。また河内良弘[1971a]は、15世紀前半に海西女真の一部である「兀狄哈」(ウデハ)が朝鮮に來朝した動向について詳細に検討し、1439年(正統4年・世宗21年)以降、朝鮮は入貢を制限したので、「兀狄哈」の來朝は減少、消滅したと主張した。

中国では蔣秀松が海西女真について研究している。蔣秀松[1981]は、海西の範囲は伊通河が松花江に流れ込む河口から、松花江中流の依蘭までと考証した。しかし明人が名づけた「海西～衛」という衛所の所在地はこの範囲以外にもあり、「海西」と呼ばれた場所にだけ「海西～衛」があったわけではないと主張した。また、明人が記述する海西女真と野人女真の相違は、居住地と明朝との朝貢関係の相違がポイントであり、両者の境界が地理的な基準だけで分けられてはいなかったとした。さらに蔣秀松[1997i]は、明人の記録のなかには海西女真を「山襄夷」、「江夷」と記述するものもあり、海西女真という単一の認識だけではなかったことも指摘した。海西女真も建州女真と同様にしばしば移動しており、永樂・宣徳年間に南遷していた。その影響を建州女真や朝鮮も受けていたことについて考察している。

楊茂盛[1989]は、「海西」、「海西江」、「海西女真」という明人が使用した意味について考察し、清朝初期には「海西」という方位は「東海」にかわったと主張している。董玉瑛[1980]は、海西女真の経済生活について検討を加え、自給自足的な経済ではなく、明朝との結びつき方が女真経済の興隆のポイントであったと指摘した。

海西女真は16世紀以降、南遷してフルン四部(ハダ、ウラ、イエヘ、ホイファ)を形成していく。以下ではフルン四部に関する研究について見てみたい。

李健才[1982]は、1982年にフルン四部が形成される過程について概括的に述べた。次いで叢佩遠[1984a]は、1400年代末から1500年代初にかけて塔山左衛(ハダ、ウラの前身)、塔魯木衛(イエヘの前身)、弗提衛(ホイファの前身)が松花江下流域から南遷したことからフルン四部は形成されたとした。そして南遷の理由として、①明朝の招撫、②馬市交易に有利な場所を求めた、③農耕、狩猟に有利な場所を求めた、④モンゴルの圧迫を避けるため

の4点を指摘した。また、各種の史料を検討して、フルン四部の世系復元を試みた。

1990年代に趙東升[1990a、1991a、1992、1994a、2005a]は、フルン四部の世系、形成過程について研究を進めた。蔣秀松[1997j]は、正統年間から嘉靖初頭までの海西女真の動向について考察し、正統年間以降では肥河衛、嘔卒河衛、考郎兀衛などが台頭したが、正徳・嘉靖以降これらの衛所は衰退し、フルン四部が形成されていく過程を述べている。また蔣秀松[1997k]は、社会経済状況の変化からフルン四部が形成されていく経過についても考察し、15世紀後半以降、海西女真は馬市で鉄器や耕牛を購入して、農業生産を向上させ勢力を拡大した衛所と、勢力拡大に失敗した衛所の二極化がおこったと推測した。拡大した衛所であった塔山左衛はハダ、ウラに、塔魯木衛がエホ、肥河衛がホイファに移行していったと主張した。馮継欽[1990]は、フルン四部の形成前史として「兀者」の状況を考察している。フルン四部は相互に、さらには建州女真とも婚姻関係をつくり、自分たちの勢力保持、拡大をはかっていた点については、王冬芳[1987]、郝素娟[2006]が考察している。

以下では、各部ごとの研究について見てみたい。

イエヘは先祖について論争があり、叢佩遠[1983]、李欣[1986]は清朝の史料にイエヘの先祖はモンゴル人とあることから、女真ではなくモンゴル人であったと主張した。これに対して張永江[1989]は反論し、イエヘが形成された時期は15世紀初であり、場所は呼倫河流域であったと考え、この時期、この場所はモンゴルのアロタイ、ウリヤーンハンと女真が交錯していた。モンゴル人が女真の集団を征服し、その後イエヘという集団が形成され、モンゴル人は女真に同化していったと主張した。つまり、イエヘの先祖はモンゴル人であったが、モンゴル人の集団がイエヘに転化したのではなく、徐々に支配層のモンゴル人は女真化していったという見解を主張した。

イエヘについては、趙東升[1991b、1995、2004]と庄福林[1993、1997a、1997b、1998、1999a]が精力的に研究している。張雲樵[1984、1993a]はイエヘの形成過程や世系について、王冬芳[1985]はイエヘの首長であった「逞加奴兄弟」について、雷広平[2000]はイエヘの盛衰について述べている。

ホイファは世系について論争が続いている。後藤智子[1993]は明朝、清朝の史料を分析して、ホイファの前身は弗提衛であったとする和田清[1934-37]、叢佩遠[1984b]の見解を退け、嘉靖前後までは肥河衛と嘔罕河衛に、南下して輝発河流域に定居してからは弗提衛に求められると主張した。董玉瑛[1984]は、ホイファの先世と考えられる肥河衛と嘔罕河衛について考察し、両衛の首長は同一家族であった可能性があると指摘した。張士尊[2003]は、ホイファは移動を繰り返しており、宣徳年間には遼東東部に南遷して「山寨夷」と明人に呼ばれ、成化年間には輝発河流域に移動して肥河衛と嘔罕河となり、嘉靖年間にホイファとして自立化したと主張した。雷広平[1999]、孫守朋[2005]、王明霞[2005]もホイファの動向について考察している。

ウラについては趙東升[1991c、1993、1994b、2005b]が多くの論文を書いており、その出自、世系、盛衰について考察している。尹郁山[1991]、王冬芳[2010a]はウラについて概括的に述べている。尉常榮[1994]は、ウラの首長布占泰について考察している。また、ウラに係する「档册」と「満文譜図」については、叢佩遠[1986b]、趙東升[1988、1990b]が考察している。

ハダの盛衰については刁書仁[1990]、赫素娟[2005]、孫守明[2006]が検討している。イエへの抗争については邱広軍[2005]が、首長の王台については王冬芳[1986、1989]が考察している。

フルン四部の都城については、以下の調査報告、研究がある。イエへの研究がもっともおこなわれており、調査報告については劉景文[1985]の報告がある。張雲樵[1985、1990、1993b]は実地調査と文献を使って、イエへ古城について考察している。また、李君[1985]、楊立新[1993]、段新樹[1994]も考察している。ホイファについては張満庭[1965]の調査報告が、ウラについては陳相偉[1966]の調査報告がある。孫明[2008]は、ウラとホイファの都城の比較をしている。

### ③野人女真

『明実録』には「女直野人」、「野人女直」の語が頻出するが、これは女真の賤称であって、野人女真を指す語ではなく、女真、女直を示す語であ

る。また朝鮮の『李朝実録』にあらわれる「野人」は女真の総称として使われている。今西春秋[1967、p. 120]は「野人女真は建州と海西を除いた、その他の女真の総称」であったと指摘している。むしろ「自分たちは野人女真である」と名乗っていた女真はいなかった。

田中克己[1959a]は、野人女真は清朝の史料が記述する東海三部(フルガ、ワルカ、ウエジ)にあたるとし、それぞれの居住地について考証した。そしてワルカは豆満江、ウスリー河流域に住み、フルガは松花江、牡丹江流域に住み、ウエジは実在しなかったと主張した。しかし、河内良弘[1992、p. 589]は「明初以来の由緒ある氏族群の存在を否定することはできない」として、この見解を退けている。河内良弘[1978]は、野人女真に比定される「嫌真兀良哈」により構成された阿速江衛の状況を検討し、明朝や朝鮮との関係や、ヌルハチに吸収され消滅する過程について考察した。増井寛也[1996-97]は、野人女真と海西女真の相違について考察している。

蔣秀松[1986]は、『大明会典』の記述する建州女真、海西女真、野人女真の区分は、一つの基準であり、どの史料にも共通する基準ではないとし、野人女真の区分基準として、①非常に遠くに住んでいる、②朝貢が不定期である、の二点を主張した。また蔣秀松[1997g、1997h]は、「七姓野人」や牡丹江上流に暮らした「嫌真兀良哈」についても考察している。

董万命[1982、1988]は、野人女真に比定される豆満江流域に暮らした「骨看兀狄哈」の分布、社会状況について考察し、「骨看兀狄哈」は清代には「庫雅喇」(クヤラ)につながる人々だと解釈している。

楊暘[1987]は、野人女真に比定される「尼麻車兀狄哈」、「都骨兀狄哈」の社会経済状況について考察し、明代前期では漁労兼農耕の氏族社会であったが、中期以降では奴隷を使った農耕もしており、氏族社会から奴隷社会へと向かいつつあったと主張した。戴光宇[2011]は、牡丹江、ウスリー河流域に暮らした「兀狄哈」について考察している。

建州、海西、野人以外の女真として、豆満江流域には「兀良哈」(ワルカ)と呼ばれた女真が暮し

ていた。朝鮮と近接したことから、朝鮮とトラブルを起こすこともあった。蒋秀松[1983a]は『李朝実録』が記述する「兀良哈」の状況について考察している。また蒋秀松[1984b、1997f]は「兀良哈」の状況や、朝鮮との関係についても考察している。田中克己[1959b]は、「兀良哈」は16世紀中葉には朝鮮化しておとなしくなったが、ヌルハチに征服され、ヘトアラへ徙民された過程について考察した。増井寛也[1999]は、「兀良哈」は朝鮮との貂皮交易でうるおい、農業生産は増加していたが、ヌルハチによる征服を受け、八旗制に編成されて消滅したことを明らかにした。

蒋秀松[1996]は、朝鮮東北境に暮らした女真のなかで、朝鮮から「楊里人」と呼ばれた人々について考察している。

#### ④明朝・朝鮮・モンゴルとの関係

明朝の対女真政策について朱誠如[1982]は、政治的な従属関係(羈縻衛所の設置)をつくり、経済的な恩恵(朝貢、馬市)を与えることで、明朝は女真を統御していたと主張した。関克笑[1999]は明朝の女真統治の特徴として、①政治的には緩やかな自治を認める、②経済的には朝貢の見返りとしての撫賞を与えて慰撫する、③軍事的には皇帝の威光に従わせるが、無理な場合は軍隊を送り懲罰を加える、という3点を指摘した。

2000年代に入ると、明朝の対女真政策の基底にある考え方を指摘する研究が出された。欒凡[2004]は「以夷治夷」の考え方を指摘し、それを具体化したのが羈縻衛所と馬市であったと主張した。王冬芳[2005a]は、明朝が女真におこなった羈縻政策の目的は「分而治之」であったと主張した。こうした研究により、明朝は女真が統合して強大になることを防ぐとともに、女真同士を抗争させ弱体化させていたことが明らかになった。

楊旣[2005]は、明朝による対女真政策を3期に分け、第1期は「招撫利用」と表現し、永楽～宣徳年間までの招撫を積極的にした時期、第2期は「剿撫並用」と表現し、正統～嘉靖初年までの招撫もするが、従わない場合には討伐もおこなった時期、第3期は「剿殺鎮王」と表現し、従わない女真(王杲など)は討伐した時期とし、「剿殺鎮王」はサルフの戦いでヌルハチに敗れて破たんしたと

主張した。

明朝が女真におこなっていた政策としては、羈縻衛所と貢勅制が重要である。両者は密接に関わっており、明朝は朝貢してきた女真の首長に武職を授け、衛所の長に任じた。その証として、明朝は首長に勅書を与えた。勅書は朝貢する資格の証明書でもあり、勅書を持つ首長は朝貢、馬市取引をおこない、大きな利益を得た。蒋秀松[1992]は羈縻衛所の特徴として、①その集団の居住地を衛所とする。②その集団の首長を衛所官に任命する。③その集団の旧慣を尊重する。④衛所下の人々には軍役や賦税を課さない、という4点を指摘する。彭建英[2004]は、必ずしもマンチュリアの事例だけを考察したわけではないが、羈縻衛所と土司制の相違について検討しており有用である。貢勅制については、三田村泰助[1965]が検討している。

羈縻衛所、貢勅制は朝貢に来た女真に用いられた政策であり、明朝は朝貢を通じて女真を管轄していた。女真の朝貢と明朝の政策について江嶋壽雄は4本の論文を書き、その動向を詳細に考察している。江嶋壽雄[1952]では、女真の朝貢に対する明朝の方針は変化しており、宣徳年間では無制限な朝貢を認めていたが、賞賜の負担に耐えられず、正統年間には制限に踏み切った経緯について考察した。江嶋壽雄[1953]は、永楽期における女真の南京朝貢の事実と、貢道の変化についても考察した。

次いで江嶋壽雄[1958]では、女真による朝貢を4期に分け、各時期の特徴について考察した。第1期は1403年(永楽元年)～1435年(宣徳10年)の33年間で、明朝は朝貢する女真を厚遇したので、女真は大挙して朝貢した。そのため明朝からの賞賜や明朝との交易は、女真社会に必須なものとなった時期だとした。第2期は1436年(正統元年)～1464年(天順8年)の30年間で、朝貢は制限されたが、それに対する慰撫として女真に馬市交易を認めた時期。第3期は1465年(成化元年)～1541年(嘉靖20年)の77年間で、明側の制限に対して、女真はそれを突き破ろうと考え、増貢の要求、新衛所の設置、勅書の書き換えをおこなった時期。第4期は1542年(嘉靖21年)～1616年(万暦46年)の77年間で、女真内部での朝貢の権利をめぐる抗争が生じ、その

抗争に勝利したヌルハチが一大勢力に成長した時期だとした。

さらに江嶋壽雄[1962]では、第4期の動向についてより深い考察をおこない、明朝は1541年(嘉靖20年)前後に新たな朝貢制限を設け、海西女真は1000名、建州女真は500名と定め、定額に達したならば終了する方針に変更したことを明らかにした。そして、この方針変更により朝貢人数が定められたため、朝貢を欲する女真同士の争いは激化したと主張した。

女真の朝貢に対する明朝の政策については、蔣秀松[1984a]も考察している。蔣秀松は3期に分け、前期(永楽～宣徳末年)は女真の招撫を積極的に起こした時期、中期(宣徳末年～嘉靖初年)は女真の朝貢を制限したので、女真は対抗策として、衛所の新設を願い出、昇官・職位の格上げや増貢の要求をおこない、より有利な朝貢条件を得ようとした時期、後期(嘉靖初年～万暦46年)は、女真は勅書の書き換え、勅書の略奪などが横行したことから女真の朝貢は厳格に管理された。そのため、朝貢回数を増やそうとした女真の間では勅書の争奪が激化した時期であったと主張した。

明朝が女真に与えた勅書は朝貢に必要なため、女真の間では争奪の対象となった。勅書の争奪がいつ頃から、どのように争奪されたのかは叢佩遠[1986a]が考察している。

明朝は羈縻衛所、貢勅制により女真を羈縻していたが、女真が従わない場合は武力討伐もしていた。明朝は1467年(成化3年)と1479年(成化15年)に、建州女真への武力討伐を朝鮮と協力しておこなった。この経緯については、刁書仁[1999]が概観している。1467年(成化3年)の討伐については、河内良弘[1974b]、荷見守義[2000]、辺佐卿[1994b]、刁書仁[2008]が考察している。1479年(成化15年)の討伐については、河内良弘[1989]、辺佐卿[2005]が考察している。

女真は朝鮮と密接な関係をもっていた。女真は朝鮮との交易に依存する一方、朝鮮を略奪することもあった。それゆえ朝鮮は女真の動向に注意を払っており、時には軍隊を派遣して武力掃討することもあった。以下では、女真と朝鮮との関係についての研究を見てみたい。

女真と朝鮮との関係には明朝の影響も大きく、

女真、高麗・朝鮮、明朝の三者の関係から考察する必要性もある。蔣秀松[1989a]は、元末から永楽初年までの建州女真をめぐる元朝・明朝と高麗・朝鮮との抗争について検討した。河内良弘[1972a、1972b、1973a]は建州女真をめぐる明朝と朝鮮との関係について、すぐれた研究を出している。李善洪[1999]はモンケテムルと朝鮮との関係について考察している。14～15世紀の女真、朝鮮、明朝の関係について検討した研究には、姜龍範[1998]、刁書仁[2001a、2001b、2002、2010a]、姜相順[2004]、于曙光[2003、2005、2007]がある。

朝鮮が女真をどう考え、いかに対応していたのかについては、膝紹箴[1981b]、何溥溥[1999]が考察している。河内良弘[1959]は、朝鮮は流亡した女真に侍衛の職を与えて、北辺の紛争を防ぐ手段にするとともに、女真の有力首長の子弟を侍衛として登用し、女真の反乱を防ぐ人質にしていた主張した。建州女真と朝鮮との関係については、王臻[2003、2005、2007、2008a、2008b]、莊吉発[1983]、李善洪[1999]、劉秉虎[2003]が考察している。海西女真と朝鮮との関係については、趙東升[2001]が検討している。

朝鮮は女真に授官をおこない、女真の羈縻をしていた。ケネス・ロビンソン[1997、1999]は朝鮮による女真授官について考察し、その目的や明朝の与えた官職と朝鮮の官職との関係性について検討を加えた。次いで、荷見守義[2003a、2003b、2004a]は、朝鮮は明朝から授官されている女真に対しては、その品級を低く抑えて授官し、朝鮮による授官を明朝より上位に置いていたと主張した。こうした見解に木村拓は疑問を投げかけた。木村拓[2008]は、明の官職の高下や在地社会における地位の高下から女真の授官を理解する方向性は適切ではないとし、官職の品階ではなく、官職に付随する品帯の授与がポイントであったという新見解を主張した。

朝鮮による女真への授官を明朝が知ると、明朝はこの行為を認めなかった。世祖は女真授官の由来を明朝に説明したが、1459年に天順帝は女真を招撫して明朝と張り合うつもりなのかと世祖を叱責した。この間の経緯については、河内良弘[1974c]が考察している。

朝鮮は国境近隣で略奪を繰り返す女真に苦慮す

ることが多く、軍隊を派遣して女真を討伐することもあった。謝肇華[2000]は1433年の「世宗15年の出兵」について考察した。王兆蘭[1990]、蔣秀松[1997d]は「世宗15年の出兵」(1433年)と「世宗19年の出兵」(1437年)の原因、経過について考察している。

1459年(天順3年・世祖5年)に朝鮮の世宗は、毛隣衛の首長であった浪学児罕を边疆侵攻の罪で処刑した。この処置に不満を持った女真は朝鮮への侵攻を激化させ、朝鮮東北境は混乱した。これを解決するため、世祖は申叔舟率いる朝鮮軍を派遣し、抵抗する女真を殺害して、その村落を焼き払った。この事件については、河内良弘[1974a]、王臻[2005]が考察している。謝肇華[2005]はこの事件を契機に、女真は民族的統合の必要性を認識したと評価している。1491年の東京城への出兵については、河内良弘[1968]が考察している。

女真と朝鮮との経済関係は、15世紀後半が転換期であった。15世紀後半以前の女真と朝鮮の交易は盛んでなかったが、貂皮交易により状況は一変した。15世紀後半以前の状況について、河内良弘[1971a]と蔣秀松[1993]は世宗20年代(1440年前後)に朝鮮へ来朝した「忽刺温兀狄哈」との交易について検討している。海西女真に属する「忽刺温兀狄哈」が朝鮮に来朝した理由は、朝鮮から馬匹などの贈与品の獲得、交易であった、しかし朝鮮側の贈与品はたいした物ではなく、さらに朝鮮側は女真の来朝制限をしたので女真は不満を持った。その結果、女真は明朝への朝貢を選択し、朝鮮へは赴かなくなったと指摘した。河内良弘[1983]は、15世紀中頃までは、女真と朝鮮との交易には有力商品があらわれなかったため振るわなかったことを主張した。

刁書仁[2007]は、成宗年間に貂皮交易が盛んになると、女真と朝鮮との交易は急増した経緯について述べている。16世紀の女真と朝鮮との関係については河内良弘[1976, 1977]が考察しており、16世紀になると貂皮交易により女真の経済力は増し、豊かな女真の隷属下に自ら入る朝鮮人がいたことを指摘している。

モンゴルとの関係については以下の研究がある。宣徳～景泰年間にかけてモンゴルの勢力は東方に拡大し、女真を脅かすこともあった。川越泰博

[1972]は、15世紀中ごろにトクトアブハ(脱脱不花)がマンチュリアに侵攻し、女真を統治下においた経緯について考察している。董玉瑛[1983]、白翠琴[1987]も15世紀中ごろのエセン、トクトアブハ(脱脱不花)による女真侵攻について考察している。藤紹箴[1983, 1986a]は明初からの関係について述べているが、重点はヌルハチ・ホンタイジ期における、女真とモンゴルの関係について述べている。

女真はモンゴル文化の影響を受けており、ヌルハチ期になり満洲文字が発案されるまで、明朝や朝鮮への文書にはモンゴル文字を使うことが多かった。河内良弘[1997]は、女真が明朝、朝鮮に送った文書は漢文や女真文字で書かれたものもあったが、多くはモンゴル語で書かれていたと指摘した。王平魯[2008]は、女真の文字使用状況について考察し、女真文字使用時期、女真文字・モンゴル文字混用時期、モンゴル文字使用時期と変化していたと指摘した。

## ⑤社会経済状況

明代前期に女真がどのような社会状況下で暮らしていたかについては、李学智[1982, 1983]が考察している。藤紹箴[1981a]は、15世紀の女真社会は軍事民主制であったという観点から分析している。王文郁[1982]は、女真は山林に散居したので、基本的には分散状態が続いた。そのため生産力の向上は難しかったと、女真の生息状況が与えた影響について指摘した。建州衛の社会経済状況については、楊陽[1988, 1990]が考察している。

明朝は夷狄である女真の生態や社会生活に対する関心は低く、まとまった記述を残していない。しかしながら、朝鮮の史料には女真の生態について詳しく述べた記述が存在する。そのなかで、咸吉道都體察使李思哲による女真の調査報告は詳細である(1)。旗田巍[1935]は李思哲報告を分析して、女真の部落構成について考察した。

女真の交易状況について、明朝との交易については以下に述べる「馬市」の部分、朝鮮との交易は既述した「明朝・朝鮮・モンゴルとの関係」の部分参照されたい。欒凡[1996, 2000a]は、明朝との馬市取引が女真経済を引き上げるとともに、対外関係の拡大をもたらしたと主張した。劉世哲

[1984a、1984b]は、女真交易の輸出、輸入について検討し、輸入では鉄器、耕牛、布類、輸出では人参、貂皮が交易品であったと指摘した。

15世紀後半以降に女真は朝鮮、中国との貂皮交易をはじめ、その取引は盛況となった。貂皮交易により女真は農業に必要な鉄器、耕牛を入手して、その生産力を増進させた。貂皮交易のはじまりと女真の経済的成長については、河内良弘[1971b]の研究が優れている。禹忠烈[1987]も貂皮交易の拡大について考察している。

貂皮交易の拡大は、女真のなかに商人を生み出したと推測される。しかし女真がしていた交易は、主要には馬市取引であったので、一般の女真が参加できる取引ではなかった。欒凡[2002、2005]は女真商人の政治性について指摘し、女真商人の特徴について検討を加えた。

15世紀後半以降、女真社会は貂皮交易の拡大による商業取引の活発化、明朝、朝鮮から入手した鉄製農具、耕牛の使用が広がったことから農業生産が増加するなど、その社会経済状況は変化した。女真の農業については、欒凡[1998a、2000b]が考察している。朱永杰[2011]は明代前期の建州女真の農業について述べている。

女真は鉄器を朝鮮、明朝から入試して、農具や武器として使用した。旗田巍[1936]は、15世紀後半には女真は鉄製武器を使っていたことを指摘した。女真による鉄器の使用、鉄器製造については、賈敬顔[1956]、李鴻彬[1984]、張徳玉[1994]、曹文奇[2002]が考察している。趙維和[2009]は、製鉄場の遺構について調査、考察している。

女真の社会経済状況について、新たな見解を主張したのは欒凡[1999]であった。欒凡は女真経済を文化周辺地域に成立した多元的経済構造(漁撈・狩猟、農耕、貿易、略奪)を持っていたと捉えた。明代初期は漁撈・狩猟経済であったが、しだいに農耕が拡大した。一方、明朝との馬市交易、朝鮮との交易がはじまり、女真社会は漁撈・狩猟、農耕を基礎としながら、交易にも依存した形態へと変化した。さらに、略奪は女真にとって経済活動でもあり、明朝・朝鮮との接触が深まるなかで、略奪は重要な富の獲得手段となった。ここに多元的な女真社会の経済構造が成立したと主張した。

(1) 『魯山君日記』巻13 端宗3年(1455年)3月己巳

(『明代満蒙史料 李朝実録抄』5、312～337頁)。

## ⑥馬市

明朝は女真との間で馬市をおこなっていた。馬市の概括的な考察は、戦前に稲葉岩吉[1913b]がしている。中山八郎[1956]の論文は、馬市の位置の考証に限定した内容である。

江嶋壽雄[1954]は馬市の起源について考察し、その起源は馬不足を憂慮した永楽帝が、開原と広寧に馬市を開設したことであったと指摘した。その後明朝の畜馬数は増え、馬購入の必要性は低下した。しかし、女真、ウリヤンハイとの馬市は羈縻の観点から継続された。ここに馬市は馬購入ではなく、女真、ウリヤンハイを羈縻する政策として位置付けられたと主張した。

当初の馬市は朝貢に伴う官市に重点があったが、しだいに私市での交易が主な目的となった。こうした馬市の変化について江嶋壽雄[1956、1957、1960、1963、1968]は、官市は衰えて私市が盛んになっていたこと、1478年(成化14年)には禁約がつけられて馬市の制度化がすすめられたこと、嘉靖末年には開原馬市は四か所でおこなわれていたこと、万暦年間には馬市のほかに互市・木市が存在したことなどを指摘した。

中国では、田静[1960]が馬市設置から明末までの状況を跡付け、馬市は明朝と夷狄との物資交換という経済的な意義だけではなく、政治的な羈縻政策であったとし、夷狄が従順な時には「開市」により羈縻し、夷狄に問題があるときは「閉市」により制裁していたと主張した。楊余練[1980]は档案を使って馬市について検討を加え、馬市は明代後期には「官弁の馬匹交易場」から「漢人、モンゴル人、女真の民間経済交流の場」になっていたと指摘した。林廷清[1982、1983]は1503年(弘治16年)正月甲午『孝宗実録』巻195の記事をもとに、以前の取引は「以馬易塩米」であったが、鐵器の購入がさかんになったこと、嘉靖、万暦年間には漢人の生活用品と同様のものを女真は購入したこと、また女真が農産物を売るようになったことを指摘し、馬市取引の具体的な変化を検証した。

以上の他に、蕭国亮[1985]、姚継榮[1998]、呂美泉[1999]も馬市について考察している。開原馬

市については朱誠如[1986]が、広寧馬市については李雲霞[1989]が、撫順馬市については辺佐卿[1994a]、蔡向榮[1995]が考察している。

档案を使い、具体的な取引動向を検討する研究もおこなわれている。周遠廉[1981]は遼寧省档案馆の档案を分析して、取引商品の種類、数量について考察した。楊暘[1988、第5章]も档案を使って、取引商品の内容について検討している。

荷見守義[2002a]も档案を分析して、編纂史料からでは知ることのできない馬市の特徴を指摘した。荷見守義は『明代遼東档案匯編』に収録されている馬市関係档案を検討して、これらの档案は取引物品に課した抽分(商税)を集計した記録と、馬市を訪れた女真などへの支出であった撫賞費を集計した記録をまとめたものだと考証した。そして、抽分と撫賞が一つの档案にまとめられていた理由として、抽分を原資として撫賞は支払われる関係があったからだと主張した。次いで荷見守義[2002b]では、『遼東志』、『全遼志』、『档案』の記述を比較検討して、遼東馬市での徴税は嘉靖初年ぐらいに完全銀納化したのではないかという仮説を主張した。また荷見守義[2004b]、『明代遼東档案匯編(上、下)』と『中国明朝档案総匯』を比較して、档案を読解する際の注意点を指摘した。

遼東馬市の考察ではないが、李滄雲[1984]は北方の馬市での交易のために、江南から綿布、煙草、陶器が運ばれていたことを指摘し、馬市交易が中国南北の取引増加を助長していたと主張した。

### ⑦三万衛、安楽・自在州

明朝はマンチュリアへの勢力拡大をすすめるなかで、洪武年間に三万衛(遼東都指揮使司管轄下)を設置して、マンチュリア北部統治の拠点とした。また永楽年間に女真の招撫が積極的におこなわれると、来帰、帰付する女真が増えたため、その居住地として1409年(永楽7年)に安楽・自在州を開原に設置した(自在州は1443年に遼陽に移動)。三万衛、安楽・自在州の状況は相互に関連するところがあるので、別々ではなく、両者の関係性に留意して述べてみたい。

三万衛所は1387年に設置され、翌38年に開原へ移動した。最初の設置場所については見解が分かっている。池内宏[1915]は三姓(依蘭)付近にあつ

たと考証した。董万倫[1993a]は池内説を批判して、会寧に設置されたと主張した。李学智[1956a]、楊暘[1980]は琿春付近にあったと主張している。関係史料が少ないため、決定的な考証は今後とも難しいと思われる。

安楽・自在州については、江嶋壽雄が50年代に二本の論文を発表して、設置過程や性格について考察した。江嶋壽雄[1950]は、明朝は安楽・自在州に居住した来帰女真に授職、衣服、住居などを与えて厚遇した点、朝貢の資格が認められた点を指摘して、安楽・自在州からの朝貢がどれくらいあったのか検証した。永楽末年から正統5～6年までは頻繁に朝貢していたが、朝貢が制限されたことから、以後の朝貢は激減したことを明らかにし、安楽・自在州の来帰女真は商人的性格を育てていたと主張した。また江嶋壽雄[1951a]は、景泰以後の来帰者は安楽・自在州以外の場所にも収容されたという分散傾向を明らかにし、来帰者が徒党を組んで反乱することに、明朝は警戒していたと主張した。

張大偉[1998]は安楽・自在州の動向について概述している。荷見守義[2007]は档案の分析を通して、安楽・自在州の知州は安楽・自在州の案件だけでなく、管轄領域をこえてさまざまな案件に関わっていたことを明らかにした。

川越泰博[1977]は三万衛にはどのような武官が在職していたのか、『三萬衛選簿』の分析を通して、上層部は女真が、下層部は漢人であったことを明らかにした。さらに、瀋陽衛、寧遠衛の状況も検討して、これらの衛所で任用された女真は極めて少なく、三万衛は特殊な衛所であったと主張した。また安楽州は三万衛の武官の居住地ではあったことを指摘し、江嶋壽雄[1999、p. 39]が「安楽・自在州の住民は武官職にありながらも民人的地位を享有していた」と述べていることに疑問を投げかけた。安楽・自在州は来帰した女真武官の居住地であったので、軍政機関ではなく民政機関の役割が求められていた。それゆえ、安楽・自在州の居住者が「民人的地位を享有していた」という理解は正しくないと主張した。この研究により、三万衛と安楽・自在州の相互関係性が明らかにされ、その後の研究に影響を及ぼした。

鞠徳源[1980]は『三萬衛選簿』からヌルガン地

区で活動した人々の事跡を抽出して、三万衛が明朝のヌルガン経営に大きな役割を果たしたことを指摘した。『三萬衛選簿』を分析して立論した内容は高く評価できるが、議論の方向性は、ヌルガン地区は中国の領土ではないという「ソ連御用学者」の主張を論破することにある。

楠木賢道[1984]は三万衛に帰属した女直軍官を、来歴により2つに分類して、それぞれの「漢化」の違いにしたがい、明朝の対応が異なると主張した。そして「明朝の遼東支配の基本方針は、女直相互を分断し、その勢力を結集させない」という分断支配が基本であったと指摘した。しかし石橋崇雄(1)から、「漢化」の要因だけで説明できるのかという批判を受けた。楠木賢道[1988]は、さらに三万衛の特徴について考察を続け、1422年の開原事変に、三万衛の女真が多数かかわっていたことを明らかにした。そして、開原事変にかかわった女真は元代に統治機構に組み込まれたことがない女真であり、事変関係者の招諭に派遣された女真は元代に統治機構に組み込まれた経緯があったと指摘した。

以上の他に、三万衛については李鴻彬[1990]、李路華[2009]も考察している。

奇文瑛[2002、2006、2007a、2007b、2011]は、これまでの三万衛、安楽・自在州についての研究成果によりつつ、三万衛に属した女真は「軍籍女真」と「達官」の二種類があったことに着目し、新たな見解を述べた。まず、安楽・自在州に居住した女真について検討し、次いでそのなかの「三

万衛達官」とはどのような人であったのか考察した。奇文瑛の主張をまとめると、洪武年間に三万衛の武官となった女真は軍籍に属したが、永楽年間以後に三万衛に属した女真の多くは「達官」と呼ばれ、必ずしも軍人の職責は担っていない。こうした「達官」は三万衛所属ではあるが、安楽・自在州に居住した来帰女真と基本的には同様であり、安楽・自在州には「達官」と来帰女真が暮らしていたと主張した。

また、奇文瑛[2012]は明代後期の安楽・自在州の状況について考察している。

女真は遼東でも生活しており、漢人と雑居した場所もあった。こうした雑居状況については朱誠如[1984]、黄松筠[1993]が考察している。蔣秀松[1997b]は内遷した女真について考察し、永楽・宣徳年間には招撫政策により内遷女真は増えたが、正統以降朝貢を制限したので減少したこと、洪武から宣徳までは安楽・自在二州で受け入れていたが、景泰以降では中国の南方に派出し、分散して受け入れていたことを指摘した。

遼東に来帰した女真や朝鮮人が暮らした東寧衛(遼陽)については、戦前では張維華[1934]が検討した。戦後では河内良弘[1986]、孫春日[1993]、程尼娜[2005]が考察している。また、東寧衛都指揮使であった金声については蔣秀松[1997e]が考察している

(1) 石橋崇雄「1984年の歴史学界 回顧と展望—明・清—」『史学雑誌』94-5、1985 p. 220。

## 日本語論文

## 愛新覚羅烏拉熙春

2009『明代の女真人』京都大学学術出版会 231p

## 池内宏

1915「三万衛につきての考」『史学雑誌』26-5  
pp. 572-580

→『満鮮史研究 中世1』pp. 683-693

1916-20「鮮初の東北境と女真との関係(1~4)」『満鮮地理歴史研究報告』2、4、5、7、1916、1918、1920 pp. 203-323、pp. 299-365、pp. 299-366、pp. 219-254

→改稿して『満鮮史研究 近世』pp. 65-222

1963『満鮮史研究 中世1』吉川弘文館 720p

1972『満鮮史研究 近世』中央公論美術出版 339p

## 稲葉岩吉

1913a「建州女直の原地及び遷住地」『満洲歴史地理』二、南満洲鉄道 pp. 547-576

1913b「明代遼東の馬市(1,2)」『史学雑誌』24-1、24-2、1913

→『増訂 満洲發達史』日本評論社、1935  
pp. 189-204

## 今西春秋

1967「jusen国域号」『東方学紀要』2 pp. 1-172

## 江嶋壽雄

1950「明初における女直の遼東移住について—自在・安楽二州の一考察—」『東洋史学』

1 pp. 57-75

→『明代清初の女直史研究』pp. 3-21

1951a「安楽自在二州に就て」『史淵』48 pp. 55-82

→『明代清初の女直史研究』pp. 25-57

1952「明正統期に於ける女直朝貢の制限」『東洋史学』6 pp. 27-44

→『明代清初の女直史研究』pp. 129-149

1953「明初女直朝貢に関する二三の問題」『史淵』58  
pp. 71-93

→『明代清初の女直史研究』pp. 99-126

1954「遼東馬市起源」『東洋史学』9 pp. 1-25

→『明代清初の女直史研究』pp. 217-244

1956「遼東馬市管見」『史淵』70 pp. 27-50

→『明代清初の女直史研究』pp. 277-304

1957「遼東馬市における私市と所謂開原南関馬市」  
『重松先生古稀紀念九州大学東洋史論叢』  
pp. 19-39

→『明代清初の女直史研究』pp. 307-331

1958「明代女直朝貢貿易の概観」『史淵』77  
pp. 1-25

→『明代清初の女直史研究』pp. 153-181

1960「統遼東馬市管見」『史淵』83 pp. 63-80

→『明代清初の女直史研究』pp. 335-355

1962「明末女直の朝貢に就て」『清水博士追悼紀念  
明代史論叢』pp. 489-518

→『明代清初の女直史研究』pp. 185-213

1963「明末遼東の互市場」『史淵』90 pp. 67-94

→『明代清初の女直史研究』pp. 359-389

1968「明末遼東の互市場補遺」『史淵』100  
pp. 157-167

→『明代清初の女直史研究』pp. 393-405

1999『明代清初の女直史研究』中国書店 629p

## 鷲淵一

1930「建州左衛の設立年代に就いて」『歴史と地理』26-6 pp. 1-21

1931「建州左衛の遷住地に就いて」『桑原隲蔵博士  
還暦紀念東洋史論叢』pp. 1175-1201

## 河内良弘

1959「李朝初期の女真人侍衛」『朝鮮学報』14

→『明代女真史の研究』pp. 171-210

1960「建州女直の移動問題」『東洋史研究』19-2  
pp. 86-155

→改稿して「移住と農業」『明代女真史の研究』  
pp. 211-230

1961「斡朶里族に於ける奴婢の供給源問題—斡朶  
里族の非侵略性—」『朝鮮学報』21・22  
pp. 590-627

1963「建州女直社会構造の一考察」田村実造編『明  
代満蒙史研究』京都大学文学部 pp. 297-339

→「楊木答兀の事件について」『明代女真史の研  
究』pp. 108-140

1968「明代の東京城地方」『田村博士頌寿東洋史論  
叢』pp. 273-294

→改稿して「朝鮮成宗の東京城出兵」『明代女真  
史の研究』pp. 539-560

1971a「忽刺温兀狄哈の朝鮮貿易(上、下)」『朝鮮  
学報』59、61 pp. 49-85、pp. 77-116

→改稿して「忽刺温兀狄哈の朝鮮来朝」『明代女  
真史の研究』pp. 267-337

1971b「明代東北アジアの貂皮貿易」『東洋史研

- 究』30-1 pp. 62-120  
→「貂皮貿易の展開」『明代女真史の研究』 pp. 592-656
- 1972a 「童猛哥帖木兒と建州左衛」『朝鮮学報』65 pp. 1-78
- 1973a 「童凡察と建州左衛」『朝鮮学報』66 pp. 73-140  
→両論文を改稿して「建州左衛の対外関係」『明代女真史の研究』 pp. 33-107
- 1972b 「李満住とその時代—明代初期、建州衛・中国・朝鮮関係史の研究—」『天理大学学報』78 pp. 153-191  
→改稿して「建州衛の対外関係」『明代女真史の研究』 pp. 141-170
- 1974a 「申叔舟の女真出兵」『朝鮮学報』71 pp. 21-58  
→『明代女真史の研究』 pp. 395-423
- 1974b 「朝鮮世祖の觀兵示威と成化三年の役」『朝鮮学報』73 pp. 1-48  
→改稿して「趙三波集団」『明代女真史の研究』 pp. 453-477  
→改稿して「成化三年の役」『明代女真史の研究』 pp. 478-493
- 1974c 「朝鮮世祖の字小主義とその挫折」『天理大学学報』25-6 pp. 1-27  
→『明代女真史の研究』 pp. 365-394
- 1975 「明代兀者衛に関する研究」『史林』58-1 pp. 115-146  
→「兀者衛に関する研究」『明代女真史の研究』 pp. 231-266
- 1976 「燕山君時代の朝鮮と女真」『朝鮮学報』81 pp. 75-91  
→『明代女真史の研究』 pp. 657-675
- 1977 「中宗・明宗時代の朝鮮と女真」『朝鮮学報』82 pp. 65-100  
→『明代女真史の研究』 pp. 676-715
- 1978 「明代野人女真阿速江衛について」『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』同朋舎 pp. 171-191  
→改稿して「阿速江衛について」『明代女真史の研究』 pp. 561-591
- 1983 「李朝時代女真人の朝鮮入京について」『天理大学学報』138 pp. 22-46  
→『明代女真史の研究』 pp. 424-450
- 1986 「明代遼陽の東寧衛について」『東洋史研究』44-4 pp. 89-127
- 1989 「李朝成宗時代の女真と朝鮮」『朝鮮学報』133 pp. 15-54  
→「成化十五年の役前後」『明代女真史の研究』 pp. 494-538
- 1992 「建州三衛の消滅と新勢力の擡頭」『明代女真史の研究』 pp. 716-743
- 1997 「明代女真の外交文書について」『東方学論集 東方学会創立五十周年記念』東方学会 pp. 457-472
- 1992 『明代女真史の研究』同朋舎出版 760p
- 川越泰博**
- 1972 「脱々不花王の女直経略をめぐる」『軍事史学』7-4 pp. 62-73
- 1977 「明代女直軍官考序説—『三萬衛選簿』の分析を通して—」『史苑』38-1・2 pp. 1-24  
→『中国典籍研究』国書刊行会、1978 pp. 69-104
- 木村拓**
- 2008 「一五世紀前半朝鮮の女真人への授職と羈縻—明の品帯を超えて—」『朝鮮史研究会論文集』46 pp. 39-65
- 楠木賢道**
- 1984 「明朝の遼東支配と三萬衛—明初の女直軍官をめぐる—」『史境』9 pp. 16-31
- 1988 「明代三萬衛女直軍官の動向」『史峯』1 pp. 1-15
- ケネスR・ロビンソン**
- 1997 「一四五五年三月の人名記録にみる朝鮮王朝の受職女真人」『年報朝鮮学』6 pp. 35-78
- 1999 「朝鮮王朝—受職女真人の関係と『朝鮮』」『歴史評論』592、1999、pp. 29-42
- 後藤智子**
- 1993 「ホイファ世系考察」『史叢』51 pp. 92-107
- 承志**
- 2009 「帝国の胎動—一起ちあがったジュシエン—」『ダイチン・グルンとその時代』名古屋大学出版会 pp. 10-75
- 園田一亀**
- 1934 「明・万曆初期に於ける遼東女直の消長」『満洲学報』3 pp. 25-132
- 1951 「建州三衛の位置に就いて」『史学雑誌』60-4

pp. 29-50

1956 「建州左衛の位置と滅亡の時期」『東洋学報』39-2 pp. 106-111

1948 『明代建州女直史研究』東洋文庫、1948 280p

1953 『明代建州女直史研究(続編)』東洋文庫、1953 401p

#### 田中克己

1959a 「明末の野人女直について」『東洋学報』42-2 pp. 127-150

1959b 「清鮮間の兀良哈(ワルカ)問題」『史苑』20-2 pp. 28-41

#### 塚瀬進

2010 「元末・明朝前期におけるマンチュリアの社会変動と地域秩序形成」『長野大学紀要』32-1 2010 pp. 75-92

#### 荷見守義

2000 「咨文と勅書—成化三年の役をめぐる中朝関係—」『社会文化史学』41 pp. 1-18

2002a 「明代遼東馬市档案考」『人文研紀要(中央大学)』44 pp. 27-59

2002b 「明代遼東馬市抽銀考」『人文社会論叢(弘前大学人文学部)』8 pp. 1-18

2003a 「世祖靖難と女直調査—一四五五年四月の人名記録に見る中朝関係—」『明代史研究会創立三十五年記念論集』汲古書院 pp. 107-128

2003b 「女直授官と朝鮮王朝—端宗三年の事例を通して—」『人文研紀要(中央大学)』48 pp. 25-52

2004a 「女直授官の構造とその変容—中朝関係における女直の位置—」『川越研究室三十周年記念明清史論集』国書刊行会 pp. 33-82

2004b 「遼東馬市信牌档—明朝档案の配列を中心として—」『明清史研究』1 pp. 3-26

2007 「明朝档案にみる安楽・自在知州」『人文研紀要(中央大学)』61 pp. 35-67

#### 旗田巍

1935 「吾都里族の部落構成—史料の紹介を中心として—」『歴史学研究』2-5 pp. 83-114

1936 「明代女真人の鉄器について」『東方学報(東京)』11 pp. 260-267

1940 「建州三衛の戸口について」『池内博士還暦記念 東洋史論叢』pp. 653-673

#### 増井寛也

1996-97 「明代の野人女直と海西女直(上、下)」『大垣女子短期大学研究紀要』37、38

pp. 55-66、pp. 37-49

1999 「明末のワルカ部女直とその集団構造について」『立命館文学』562 pp. 61-107

#### 三田村泰助

1965 「ムクン・タタン制の研究」『清朝前史の研究』同朋舎 pp. 107-282

#### 諸星健児

1994 「奎章閣所蔵『撫遼俘勦建州夷酋王杲疏略』について」『東洋大学文学部紀要 史学科編』20 pp. 61-87

#### 和田清

1934-37 「明初の満洲経略(上、下)」『満鮮地理歴史研究報告』14、15 pp. 177-298、pp. 71-292

→『東亜史研究(満洲篇)』東洋文庫、1955 pp. 260-477

1937 「建州本衛の移動について」『満鮮地理歴史研究報告』15 pp. 343-353

→『東亜史研究(満洲篇)』東洋文庫、1955 pp. 478-484

1959 『東亜史研究(蒙古篇)』東洋文庫 938p

#### 中国語論文

##### 尉常榮

1994 「布占泰—烏拉部的首領」傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社 pp. 261-264

##### 尹郁山

1991 「明代烏拉部」『烏拉史略』吉林文史出版社 pp. 45-59

##### 于曉光

2003 「明朝与朝鮮圍繞女真問題交涉論析」『重慶三峡学院学報』19 pp. 65-69, 94

2005 「土木之變前後明朝与朝鮮圍繞女真問題的交涉」『登州港与中韓國際學術討論會論文集』山東大学出版社 pp. 406-416

2007 「洪武時期明朝与朝鮮圍繞女真問題的交涉初探」『韓国研究論叢』1 pp. 282-294

##### 禹忠烈

1987 「明中後期女真人和遼東以及朝鮮的貿易關係」『東北地方史研究』1 pp. 70-74

**王文郁**

1982「地理環境与明代女真族社会經濟的特点」『南开史学』2 pp. 62-93

**王学松**

1986「試論明代前期建州女真的生産方式及其社会性質」『黒龍江民族叢刊』1 pp. 43-46

**王雁**

2006「女真首領李滿住在鴨綠江流域的活動」『東北史地』2 pp. 50-53

**王鍾翰**

1956「明代女真人的分布」『中国民族問題研究集刊』5 pp. 127-163  
→中国人民大学清史研究所編『清史論文選集』1、中国人民大学出版社、1978 pp. 1-48  
→『東北歴史地理論著匯編』4、吉林人民出版社、1987 pp. 29-66  
→『清史新考』遼寧大学出版社、1991 pp. 1-45  
→『王鍾翰清史論集』1、中華書局、2004 pp. 746-792

**王臻**

2003「朝鮮太宗与明朝争奪建州女真所有權述論」『延边大学学报(社会科学版)』3 pp. 106-109  
2006「明朝与李朝在郎卜爾罕問題上的政策之比較研究」『史学集刊』1 pp. 82-87  
2007「建州女真李滿住部与朝鮮王朝的關係探析」『滿族研究』4 pp. 86-92  
2008a「建州女真凡察部与朝鮮關係述論」『東北史地』1 pp. 40-44  
2008b「建州女真董山部与朝鮮王朝的關係述論」『北方文物』3 pp. 61-66  
2005『朝鮮前期与明建州女真關係研究』中国文史出版社 278p

**王崇時**

1993「略説朝鮮『李朝夷録』中的忽刺温野人」  
李洵主編『明史論集』吉林文史出版社  
pp. 516-522

**王兆蘭**

1990「15世紀30年代朝鮮兩次入侵建州」『社会科学戰線』1 pp. 199-204  
→刁書仁主編『中朝關係史研究論文集』吉林文史出版社、1995 pp. 159-169  
1994「明廷对楊木塔兀逃官兵的招撫」『長春師院学报』3 pp. 7, 12-17

**王冬芳**

1985「葉赫部首領逞加奴兄弟的興衰」『東北地方史研究』1 pp. 45-47  
1986「明遼東女真汗—王台」『東北地方史研究』4 pp. 45-51  
1987「聯姻政策在女真統一中的作用」『社会科学輯刊』5 pp. 58-63  
1989「海西女真王台称汗小議」『清史研究通訊』2 pp. 33-35, 49  
2005a「明朝对女真人的羈縻政策、文化歧視及对後世的深遠影響」『明史研究』9 pp. 289-298  
2005b「建州左衛初建過程考実」『清史論叢』pp. 86-100  
2007季明明「猛哥帖木兒的被迫遷徙」『明史研究』10 pp. 258-271  
2010a「地緣集團—忽刺温即烏拉部」『東北史地』4 pp. 71-75  
2009季明明『女真—滿族建国研究』学苑出版社 604p  
2010b『明清史考異』北京燕山出版社 506p

**王平魯**

2008「滿文創制前明代女真人的文字使用情况初探」  
傅波主編『從興京到盛京』遼寧民族出版社  
pp. 206-221

**王明霞**

2005「輝發部的歷史与薩滿文化」『吉林師範大学学报(人文社会科学版)』5 pp. 92-96

**何溥澄**

1992謝肇華「猛哥帖木兒論」『滿学研究』1、吉林文史出版社 pp. 76-90  
→『第二屆明清史國際學術討論會論文集』天津人民出版社、1993 pp. 614-626  
1999「李朝初期对女真的政策」『滿族研究』2 pp. 33-41

**郭毅生**

1979「明代建州衛新探」『北方論叢』3 pp. 71-77  
→『東北歴史地理論著匯編』4、吉林人民出版社、1986 pp. 285-292

**赫素娟**

2005「論哈達衰亡原因」『吉林師範大学学报』6 pp. 67-69  
2006「論扈倫四部与建州女真聯姻的特点与影響」『滿族研究』2 pp. 33-38

**関克笑**

1999「簡論明朝对女真人的統治」『滿族研究』2  
pp. 27-32

**奇文瑛**

2002「論明朝内遷女真安置政策—以安樂、自在州  
為例」『中央民族大学學報(哲学社会科学版)』2  
pp. 51-56

2006「明代“安樂州住坐三万衛帶俸達官”考」『燕  
京學報』20 pp. 79-96

2007a「論『三萬衛選簿』中的軍籍女真」『學習與  
探索』5 pp. 205-210

2007b「論『三萬衛選簿』中的軍籍女真」『黑水文  
明研究』黑龍江人民出版社 pp. 136-141

2012「論明後期安樂、自在州的变化」『中国边疆史  
地研究』3 pp. 115-126, 149-150

2011『明代衛所歸附人研究 以遼東和京畿地区衛  
所達官為中心』中央民族大学出版社 260p

**鞠德源**

1980「從『三万衛選簿』看明朝政府奴兒干地区經  
營」『文物集刊』2 pp. 1-23

**邱広軍**

2005「哈達、葉赫“構兵”不息原因淺析」『吉林師  
範大學學報』6 pp. 70-72

**姜相順**

2004「永樂宣德年間明朝、女真和朝鮮關係述略」  
『明清論叢』5 pp. 230-241

**姜龍範**

1998「洪武至永樂初年圍繞女真問題所展開的中朝  
交涉」『延边大學學報(社会科学版)』4 pp. 52-56

**賈敬顏**

1956「鉄与女真人的發展」『中国民族問題研究集刊』  
5 pp. 115-126

1991「《龍飛御天歌》所記的女真首領」『北方文物』  
1 pp. 51-55

→賈敬顏『東北古代民族古代地理叢考』中国社  
会科学出版社、1993 pp. 181-192

→刁書仁主編『中朝關係史研究論文集』吉林文  
史出版社、1995 pp. 182-190

**吳哈**

1934「關於東北史上一位怪傑的新史料」『燕京學報』  
17

→『朝鮮李朝實錄中之李滿住』『讀史  
讀書·新知三聯書店、1979 pp. 39-64

**黄松筠**

1993「明代女真人与漢族的關係」李洵主編『明史  
論集』吉林文史出版社 pp. 504-515

**蔡向榮**

1995「明代撫順馬市貿易」『遼寧大學學報』4  
pp. 24-25

**謝肇華**

2000「評析朝鮮对建州衛女真的第一次用兵」『中央  
民族大学學報(哲学社会科学版)』4 pp. 54-58

2005「浪浪兒罕事件与女真民族精神的覺醒」『滿族  
研究』5 pp. 61-67

**朱永杰**

2011韓光輝「明代建州女真發展前期農業区域特征  
述論」『北方文物』2 pp. 84-87, 91

**朱誠如**

1982「論明代女真与中央王朝的關係」『遼寧師院學  
報』3 pp. 62-68

→『管窺集』pp. 18-26

1984「明代遼東女真人与漢人雜居狀況的歷史考察」  
『遼寧師院學報』1 pp. 78-84

→『東北歷史地理論著彙編』4、吉林人民出版  
社、1987 pp. 304-310

1986「明代遼東開原的民族貿易市場」『東北地方史  
研究』1 pp. 53-56

→『管窺集』pp. 33-38

2002『管窺集 明清史散論』紫禁城出版社 348p

**周遠廉**

1981「明代女真与漢族的關係—明代遼東档案研究  
之四」『中央民族學院學報』2 pp. 111-119

**徐健竹**

1982「明代建州衛新考」『中国史研究』4  
pp. 112-121

→『東北歷史地理論著匯編』4、吉林人民出版  
社、1986 pp. 266-275

1983a「論建州左衛的建立与變遷」『社会科学輯刊』  
1 pp. 92-100

→『東北歷史地理論著匯編』4、吉林人民出版  
社、1986 pp. 276-284

1983b「明代東開原毛憐衛考」『明史研究論叢』2  
pp. 347-362

**徐中舒**

劄記 1936「明初建州女真居地遷徙攷」『中央研究員歷史  
語言研究所集刊』6-2 pp. 163-192

- 『東北歴史地理論著匯編』4、吉林人民出版社、1987 pp. 236-265
- 蔣維忠**  
1995「明代初期建州女真的社会形態」『滿族研究』1 pp. 8-16
- 蕭国亮**  
1985「明代漢族与女真族的馬市貿易」『平准學刊』5下 pp. 463-476
- 蔣秀松**  
1981「海西与海西女真」『民族研究』5 pp. 31-38  
→『東北民族史研究(三)』pp. 343-352  
1983a「『李朝實錄』中的兀良哈」『黑龍江文物叢刊』1 pp. 33-35  
→『東北民族史研究(三)』pp. 247-249  
1983b「試論李滿住在建州女真興起中的作用」『求是學刊』3 pp. 94-100  
→『東北民族史研究(三)』pp. 332-340  
1983c「楊木答兀叛逃事件評述」『學習与探索』3 pp. 134-138  
→『東北民族史研究(三)』pp. 217-228  
1984a「明代女真的敕貢制」『民族研究』4 pp. 16-29  
→『東北民族史研究(三)』pp. 182-197  
1984b「從兀良哈与兀狄哈的比較中看女真各部發展的不均衡性」『社会科学戰線』1 pp. 207-213  
→『東北民族史研究(三)』pp. 414-427  
1984c「毛憐衛的變遷」『社会科学輯刊』1 pp. 99-107  
→『東北歷史地理論著彙編』4、吉林人民出版社、1986 pp. 311-319  
→『東北民族史研究』(三)、中州古籍出版社、1997 pp. 298-309  
1986「明代的野人女真」『黑河月刊』2 pp. 46-48  
→『東北民族史研究』(三) pp. 389-391  
1989a「明初朝鮮半島東北部之女真諸部的歸屬」『博物館研究』2 pp. 55-61  
→『東北民族史研究(三)』pp. 237-244  
1989b「論建州左衛的東遷」『黑龍江民族叢刊』3 pp. 80-87  
→『東北民族史研究(三)』pp. 277-284  
1990「“庚寅之變”与猛哥帖木兒西遷」『滿族研究文集』吉林文史出版社 pp. 22-32  
→『東北民族史研究(三)』pp. 270-276  
1991「斡朵里部何時南遷」『北方文物』4 pp. 86-93  
→『東北民族史研究(三)』pp. 250-258  
1992「羈縻衛所和羈縻政策」『黑龍江民族叢刊』4 pp. 57-66  
→『東北民族史研究(三)』pp. 154-164  
1993「略述忽刺温女真对朝鮮“朝聘”」『博物館研究』1 pp. 41-48, 54  
→『東北民族史研究(三)』pp. 353-361  
1996「“楊里人”考」『清史研究』3 pp. 86-93  
→『東北民族史研究(三)』pp. 229-236  
1997a「關於建州女真的遷徙、集聚和組合」『東北民族史研究(三)』pp. 321-331  
1997b「明代內遷的女真人」『東北民族史研究(三)』pp. 198-210  
1997c「論凡察、童倉之率部西遷」『東北民族史研究(三)』pp. 285-292  
1997d「論十五世紀三十年代朝鮮兩次入侵建州」『東北民族史研究(三)』pp. 310-320  
1997e「明初東寧衛都指揮使一金声」『東北民族史研究(三)』pp. 211-216  
1997f「斡朵里、兀良哈与朝鮮“六鎮”」『東北民族史研究(三)』pp. 259-269  
1997g「“七姓野人”考」『東北民族史研究(三)』pp. 392-396  
1997h「嫌真兀良哈研究」『東北民族史研究(三)』pp. 397-413  
1997i「海西女真的遷徙」『東北民族史研究(三)』pp. 365-370  
1997j「海西女真的核心衛分」『東北民族史研究(三)』pp. 371-379  
1997k「扈倫四部的興起」『東北民族史研究(三)』pp. 380-386  
1997l『東北民族史研究』(三)、中州古籍出版社 464p
- 庄福林**  
1993「葉赫部界限考」『滿族研究』3 pp. 3-6  
1996「建州衛初治所在地考」『滿族研究』1 pp. 25-28  
→『葉赫研究』pp. 80-87  
1997a「試論葉赫部的滅亡及其原因」『滿族研究』1 pp. 16-23  
1997b「試論“葉赫之墟”及其復蘇」『滿族研究』2 pp. 17-22

1998「葉赫部地名考」『滿族研究』1 pp. 29-35

1999a「葉赫部史上的“張”地地望辨」『滿族研究』1 pp. 25-32

1999b『葉赫研究』吉林教育出版社 301p

### 薛虹

1978「明代初期建州女真的遷徙」『吉林師大學報』3 pp. 25-35

→『清史論文選集』1、中国人民大学出版社、1979 pp. 49-67

→『東北歷史地理論著匯編』4、吉林人民出版社、1986 pp. 293-303

→『薛虹學術論集』吉林文史出版社、1994 pp. 235-252

1979「明代初期建州女真的社會形態」『吉林師大社會科學叢書』1

→『薛虹學術論集』吉林文史出版社、1994 pp. 253-274

1986「明代前期建州女真的社會組織」中国第一歷史檔案館編『明清檔案與歷史研究』上、中華書局、1986 pp. 269-282

→『薛虹學術論集』吉林文史出版社、1994 pp. 275-287

### 莊吉堯

1983「建州三衛的設置及其與朝鮮的關係」『中韓關係史國際研討會論文集』台北

pp. 163-180

→『清史論集』5、文史哲出版社、1997 pp. 1-28

### 叢佩遠

1983「葉赫部族屬試探」『黑龍江文物叢刊』2 pp. 4-9

1984a「扈倫四部形成概述」『民族研究』2 pp. 8-17

1984b「扈倫四部世系考索」『社會科學戰線』2 pp. 200-212

1986a「明代女真的勅書之爭」『文史』26 pp. 191-213

1986b「烏拉哈薩虎貝勒後輩檔冊與滿文譜圖初探」『滿族研究』3 pp. 47-55

### 曹文奇

2002楊秀「女真與鐵器」『滿族研究』2 pp. 45-53

→曹文奇主編『新賓清前史研究論叢』遼寧民族出版社、2003 pp. 104-119

### 孫守朋

2005範劍飛「輝發都城及輝發部的歷史」『吉林師範

大學學報(人文社會科學版)』5 pp. 88-91

2006「哈達部城寨及哈達部的興衰」『東北史地』6 pp. 59-61

### 孫春日

1993「明代朝鮮人在東寧衛聚居狀況的歷史考察」

李洵主編『明史論集』吉林文史出版社

pp. 462-475

### 孫進己

1987張璇如、蔣秀松『女真史』吉林文史出版社 303p

### 孫與常

1999崔文植「明廷招諭楊木塔兀事實考析」『社會科學戰線』6 pp. 159-162

### 孫明

2008「烏拉王城與輝發王城建制的比較研究」『滿族研究』4 pp. 79-82

### 戴光宇

2011「兀狄哈諸部落及其分布」『滿族研究』2 pp. 44-50, 57

### 段新樹

1994「葉赫城寨考証」『博物館研究』1 pp. 44-54

### 張維華

1934「明代遼東衛所建置考略」『禹貢半月刊』1-7、1934 pp. 6-19

→『東北歷史地理論著匯編』4、吉林人民出版社、1986 pp. 196-209

### 趙維和

2003「試論建州右衛王杲」『滿族研究』4 pp. 44-47

2009王麗「後金冶鉄、炒金鍊銀及燒造業遺址考証」『滿族研究』3 pp. 29-35

### 張雲樵

1984「葉赫研究—葉赫的崛起及其為爭奪女真最高統治權的戰爭(上、下)」『松遼學刊』3、4 pp. 101-106、pp. 57-62

1985「葉赫古城考弁」『東北師大學報』3 pp. 53-55

1990「葉赫古城考察紀略」『滿族研究文集』吉林文史出版社 pp. 63-74

1993a「明末海西女真葉赫部的衛屬、都城及世系的考訂」『北方文物』1 pp. 51-64

1993b張雲樵「明扈倫四部之一的葉赫部早期居城之所在」『東北師大學報(哲學社會科學版)』1 pp. 49-52

**張永江**

1989 葉雪冬 「試論葉赫部の族属与歴史分期問題」  
『内蒙古大学学报（哲学社会科学版）』 2  
pp. 28-36

**趙広慶**

1991 「王杲其人其事」『東北亜歴史与文化』遼瀋書  
社出版 pp. 570-573  
→ 傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社、1994  
pp. 265-270

**張士尊**

2003 「明輝發部先世南遷考」『明史研究』 8  
pp. 155-163  
2007 「建州衛在渾江地区的活動及王甲部族源考」  
『明史研究』 10、2007 pp. 247-257

**刁書仁**

1990 「哈達部興衰考論」『吉林師範学院学報』 2  
→ 『明清東北史研究論集』吉林文史出版社、1995  
pp. 368-373  
1999 「明成化年間明与朝鮮兩次征討建州女真」『史  
学集刊』 2 pp. 35-39  
→ 『明清中朝日關係史研究』 pp. 130-141  
2001a 「元末明初朝鮮半島的女真族与明、朝鮮の關  
係」『史学集刊』 3 pp. 65-69  
→ 『明清中朝日關係史研究』 pp. 14-29  
2001b 王劍「明初毛憐衛与朝鮮的關係」『明史研究』  
7 pp. 252-268  
→ 『明清中朝日關係史研究』 pp. 91-115  
2002 「論明前期幹朵里女真与明、朝鮮的關係」『中  
国边疆史地研究』 1 pp. 44-54  
→ 『明清中朝日關係史研究』 pp. 70-89  
2007 「明代女真与朝鮮的貿易」『史学集刊』 5  
pp. 72-78  
2008 「明成化初年对建州三衛用兵考述」『中国边疆  
史地研究』 4 pp. 24-32  
2010a 「景泰、天順年間建州三衛女真与明朝、朝鮮  
的關係」『史学集刊』 1 pp. 101-107  
2010b 「正統年間建州左衛西遷考実」『中国边疆史  
地研究』 4 pp. 34-46

**張璇如**

1985 「建州女真王杲的崛起」『博物館研究』 2  
pp. 50-52  
→ 『東北歷代人物論著伝記匯編』吉林人民出版  
社、1987 pp. 466-467

**張大偉**

1998 「明代遼東都司轄下安樂、自在二州之分析」  
『北方文物』 2 pp. 87-89, 101

**張泰湘**

1985 「論建州女真淵流与南遷」『北方論叢』 2  
pp. 56-60

**趙東升**

1988 「關於《烏拉哈薩虎貝勒後輩档冊与滿文譜図  
初探》的幾点補充說明」『滿族研究』 3 pp. 69-76  
→ 『扈倫四部研究』 pp. 137-154  
1990a 「扈倫探踪」『長白学圃』 6  
→ 『扈倫四部研究』吉林文史出版社、2005  
pp. 171-240  
1990b 「烏拉哈薩虎貝勒後輩档冊与滿文譜図淺解」  
『長白学圃』 6、1990  
→ 『扈倫四部研究』 pp. 155-170  
1991a 「扈倫四部世系匡謬」『滿族研究』 4  
pp. 29-40  
→ 『扈倫四部研究』吉林文史出版社、2005  
pp. 101-110  
1991b 「葉赫部始祖族属質疑」『四平民族研究』 4  
→ 『扈倫四部研究』 pp. 128-136  
1991c 「烏拉国史略」『永吉文史資料』 4、1991  
→ 『扈倫四部研究』 pp. 241-281  
1992 「扈倫四部源流考辨」『北方民族』 4  
→ 『扈倫四部研究』吉林文史出版社、2005  
pp. 91-100  
1993 「關於烏拉国的世系和家族」『北方民族』 2  
→ 『扈倫四部研究』 pp. 78-90  
1994a 「扈倫四部的對外關係初探」『滿族研究』 2  
pp. 11-16  
→ 『扈倫四部研究』吉林文史出版社、2005  
pp. 66-77  
1994b 「明末烏拉部是否源于塔山左衛」『黑龍江民  
族叢刊』 1 pp. 58-61  
→ 『扈倫四部研究』 pp. 60-65  
1995 「關於葉赫部首領的族属問題」『滿族研究』 4  
pp. 55-60  
→ 『扈倫四部研究』 pp. 47-59  
2001 那炎「海西女真与朝鮮的關係」『滿族研究』 2  
pp. 37-44  
→ 『扈倫四部研究』 pp. 1-16  
2003 「清皇室及發源地及清肇祖探討」『滿族研究』

- 1 pp. 56-62  
→『滿族歷史研究』pp. 1-13
- 2004「談葉赫部歷史的幾個問題」『吉林師範大學學報』4 pp. 91-95  
→『扈倫四部研究』pp. 111-121
- 2005a「扈倫四部和海西女真」『扈倫四部研究』吉林文史出版社 pp. 25-34
- 2005b「明末烏拉部与朝鮮的边界糾紛」『扈倫四部研究』吉林文史出版社 pp. 17-24
- 2005c『扈倫四部研究』吉林文史出版社 281p
- 2005d『滿族歷史研究』吉林文史出版社 274p
- 張德玉**  
1994「明代女真鉄業的發展」傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社 pp. 64-68
- 張滿庭**  
1965「輝發城調查簡報」『文物』7 pp. 35-43
- 趙立靜**  
1994「試論王杲其人」傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社 pp. 271-277
- 陳相偉**  
1966「明代扈倫四部烏拉部故址—烏拉古城調查」『文物』2 pp. 28-35
- 程尼娜**  
2005「明代对遼東都司東寧衛朝鮮居民的統轄探析」登州港与中韓國際學術討論會論文集』山東大學出版社 pp. 397-405
- 田靜**  
1960「明代遼東的馬市貿易」『史學月刊』6  
→『明代社會經濟史論集』存粹學社、1979 pp. 358-364
- 董玉瑛**  
1980「明代海西女真的經濟生活」『社會科學戰線』4 pp. 187-191
- 1983「明正統末景泰初女真的動亂」『史學集刊』4 pp. 22-26
- 1984「明末輝發部首領的先世」『博物館研究』3 pp. 66-69, 26
- 滕紹箴**  
1979「明代建州女真人」『中央民族學院學報』1·2 pp. 38-47
- 1981a「明代女真社會的軍事民主制」『黑龍江文物叢刊』1 pp. 23-29
- 1981b「從朝鮮《李朝實錄》看明代女真族与朝鮮的友好關係」『延邊大學學報(社會科學版)』3 pp. 75-82
- 1983「試論明代女真与蒙古的關係」『民族研究』4 pp. 42-49, 79
- 1986a「淺論明代女真与蒙古關係演變中的經濟問題」『遼寧師範大學學報(社會科學版)』2 pp. 81-88
- 1986b「明代女真振興述論」『北方文物』4 pp. 60-66
- 2010「“斡朶里”非今“馬大屯”考」『清史研究』3 pp. 116-123
- 2011「“斡朶里”非今“馬大屯”考(二)」『東北史地』4 pp. 36-42
- 董万倫**  
1982「明代東海骨看兀狄哈社會狀況的考察」『延邊大學學報』3 pp. 90-99
- 1985「明代建州女真遷徙新証」『求是學刊』3 pp. 90-96
- 1987「明初建州女真遷徙考」『歷史地理』5 pp. 208-220
- 1988「明代骨看兀狄哈研究」『北方文物』3 pp. 45-53
- 1990「建州女真定居阿木河研究」『黑龍江民族叢刊』3 pp. 61-66
- 1991a「建州女真定居妥關總管府城研究」『黑龍江民族叢刊』3 pp. 73-79
- 1991b「關於斡朶里部初遷時間与地址問題」『北方文物』4 pp. 93-99
- 1993a「明代三万衛初設地研究」『歷史地理』11 pp. 224-232  
→刁書仁主編『中朝關係史研究論文集』吉林文史出版社、1995、pp. 170-181
- 1993b「《龍飛御天歌》記東女真族源研究」『黑龍江民族叢刊』4 pp. 56-62
- 1994「《龍飛御天歌》記東女真姓氏及部族移動、合流研究」『黑龍江文物叢刊』3 pp. 66-73
- 1992『清肇祖伝』遼寧人民出版社 352p
- 任麗穎**  
2011孟凡雲「論建州女真首領王杲犯邊」『北方文物』1 pp. 65-69
- 白翠琴**  
1987「明代前期蒙古与女真關係述略」中國蒙古史學會編『中國蒙古史學會論文集(1983)』

- pp. 208-215
- 莫東寅**  
1958「明初女真族的社会形態」『滿族史論叢』人民出版社 pp. 1-43
- 馮繼欽**  
1990「明代兀者新探」『黑龍江民族叢刊』1 pp. 31-37
- 辺佐卿**  
1994a「董山与撫順馬市」傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社 pp. 282-287  
1994b「試論丁亥之役」『滿族研究』4 pp. 8-13  
→傅波主編『清前史論叢』遼寧人民出版社, 1994 pp. 101-107  
2005「試論明成化十五年之役」傅波主編『赫圖阿拉与滿族姓氏家譜研究』遼寧民族出版社 pp. 56-70
- 彭建英**  
2004「明代羈縻衛所制述論」『中国边疆史地研究』3 pp. 26-38, 148
- 孟森**  
1932a「建州衛地址變遷考」『国学季刊』3-4、1932  
→『明代边防 明史論叢之六』学生書局、1968 pp. 9-26  
→『明清史論著集刊統編』中華書局、1986 pp. 41-60  
→『東北歷史地理論著匯編』4、吉林人民出版社、1986 pp. 215-235  
1932b「清史稿中建州衛考辨」『中央研究院歷史語言研究所集刊』3-3 pp. 331-344  
→『明清史論著集刊』下、中華書局、1959 pp. 353-379  
→存萃學社編『清史論叢』第三集、大東圖書公司、1977 pp. 106-125  
→『明清史論著集刊』上、中華書局、2006 pp. 298-316  
1934-37『明元清系通紀』  
→『明元清系通紀』1~4、中華書局、2006
- 孟凡雲**  
2011「從女真首領王兀堂与明朝關係的轉變看明朝民族政策失誤」『遼寧師範大學學報(社会科学版)』3 pp. 112-115
- 楊旰**  
2005胡世傑「試論明王朝对女真人的民族政策与其覆滅之關係」傅波主編『赫圖阿拉与滿族姓氏家譜研究』遼寧民族出版社 pp. 288-300
- 姚斌**  
2003「建州女真董鄂部的歷史初探」『滿族研究』2 pp. 60-64
- 楊業進**  
1987「建州女真奴隸制的發展狀況」『中国社会科学院研究生院學報』3 pp. 69-73
- 姚繼榮**  
1998「明代遼東馬市述論」『遼寧師範大學學報(社会科学版)』4 pp. 85-88
- 楊茂盛**  
1989「關於海西、海西江和海西女真」『學習与探索』6 pp. 134-137
- 楊余練**  
1980「明代後期的遼東馬市与女真族的興起」『民族研究』5 pp. 27-32
- 楊暘**  
1980李治亭、傅朗云「明代遼東都司及其衛的研究」『社会科学輯刊』6 pp. 79-85  
→『東北歷史地理論著匯編』4、吉林人民出版社、1986 pp. 186-192  
1987「明代尼麻車、都骨兀狄哈部族社会經濟形態考察」『北方文物』4 pp. 77-80  
1988「建州女真建州衛胡里改部社会經濟形態考察」『博物館研究』1 pp. 37-39  
1990陶文章「建州左衛斡朵里部社会經濟結構考察」『滿族研究文集』吉林文史出版社 pp. 163-174  
1982袁閻琨、傅朗云『明代奴兒干都司及其衛所研究』中州書畫社 332p  
1988『明代遼東都司』中州古籍出版社 303p
- 楊立新**  
1993「葉赫古城考略」『北方文物』4 pp. 38-43
- 雷広平**  
1999「輝發部興衰考略」『社会科学戰線』3 pp. 178-183  
2000「葉赫部落探微」『社会科学戰線』3 pp. 197-202
- 樊凡**  
1996「試論貿易对明代女真經濟的影響」『延邊大學學報(社会科学版)』2 pp. 27-31  
1998a「明代女真族從事農耕的生產組織」『北方文物』3 pp. 78-82

1998b 「明代後期女真社会的民族結構」『西南師範大學學報(哲學社會科學版)』3

pp. 98-103

2000a 「明代女真族的貿易關係網及社會効応」『北方文物』1 pp. 73-76

2000b 「明代女真族的農耕經濟狀況芻議」『黑龍江民族叢刊』1 pp. 59-64

→『明代史研究(日本)』28、2000 pp. 23-32

2002 趙毅 「15-17世紀東北地區女真商人的社會角色」『明清論叢』3 pp. 298-317

2004 「明朝治理東北邊疆思想芻議」『明代史研究』32 pp. 10-18

2005 「明代女真社会的“商人”群体」『社會科學戰線』4 pp. 146-150

1999 『一種文化邊緣地帶的特有經濟類型剖析』東北師範大學出版社 174p

#### 李雲霞

1989 「試論明代廣寧的馬市」『滿族研究』4 pp. 13-18

#### 李學智

1956a 「朝鮮史籍中之移蘭豆漫與明代三萬衛考」『大陸雜誌』12-8 pp. 250-258

1956b 「明代初置建州衛衛址考」『大陸雜誌』13-1 pp. 251-257

→『邊疆論文集』1、國防研究院、1964 pp. 251-257

→『明代邊防 明史論叢之六』學生書局、1968 pp. 253-270

1982 「女真(滿洲)民族社會組織的研究(一)－元末明初女真民族重組後之社會結構」

『邊政研究所年報』13 pp. 23-42

1983 「女真(滿洲)民族社會組織的研究(二)－分論明代初期女真民族社會組織形態之演變與經過一」

『邊政研究所年報』14 pp. 93-122

1984 「明代女真民族史之研究(一)－明初女真民族之來源與分布」『邊政研究所年報』15 pp. 15-40

#### 李欣

1986 金基浩 「葉赫部史初探」『滿族研究』3 pp. 10-17

→金基浩編『滿族研究文集』吉林文史出版社、1990 pp. 47-62

#### 李景蘭

1983 「從十五世紀建州女真階級關係的變化看奴隸

制生產關係之確立」『清史研究通訊』4 pp. 10-15

1986 「論十五世紀開始的建州女真奴隸制度」『東北地方史研究』2 pp. 21-29

#### 李君

1985 「葉赫部東西兩城小考」『博物館研究』1 pp. 88-90

#### 李健才

1982 「明代扈倫四部」『博物館研究』1 pp. 65-72

→『東北史地考略』pp. 228-243

→『東北亞史地論集』pp. 210-222

1986 「明代建州衛再探」『東北史地考略』pp. 213-228

→『東北亞史地論集』pp. 197-209

#### 李鴻彬

1984 「明代女真鉄業發展簡述」『民族研究』5 pp. 67-73

1990 「簡論三萬衛」『社會科學戰線』1 pp. 210-217

#### 李自然

2000 「試論元末明初女真人遷徙的原因及其影響」

『黑龍江民族叢刊』4 pp. 71-74

#### 李善洪

1999 「猛哥帖木兒與朝鮮關係述略」『史學集刊』3 pp. 10-15

→『第七屆明史國際學術討論會論文集』東北師範大學出版社、1999 pp. 509-515

#### 李路華

2009 「明代三萬衛考述」『社會科學戰線』11 pp. 119-122

#### 李洵雲

1984 「從馬市中幾類商品看明中後期江南與塞北的經濟聯系及其作用」『內蒙古師大學報(哲學社會科學版)』4 pp. 34-39

#### 劉景文

1985 「葉赫古城調查記」『文物』4 pp. 80-84

#### 劉世哲

1984a 「明代女真物產輸入幾種」『黑龍江文物叢刊』4 pp. 29-35

1984b 「明代女真幾種物產輸出述議」『民族研究』6 pp. 39-46

#### 劉秉虎

2003 「建州女真與朝鮮交涉之研究」『大連大學學報』3 pp. 52-55

#### 林廷清

1982 「明代遼東馬市性質的演變」『南開史學』2

pp. 135-159

1983「論明代遼東馬市從官市到民市的轉變」『民族研究』4 pp. 50-57

**呂美泉**

1999「明朝馬市研究」『求是學刊』1999-5 pp. 98-102